

中心無き世界  
Vol.1

ジャズが運んだもの



2021年5月12日(水) 18:30開場 19:00開演  
会場:東京オペラシティリサイタルホール

主催/一般社団法人 アンサンブル・ノマド <http://www.ensemble-nomad.com/>

助成/公益財団法人 ロームミュージックファンデーション NOMURA FOUNDATION 公益財団法人 花王 芸術・科学財団

公益財団法人 朝日新聞文化財団

マネジメント/keynote

## Ensemble NOMAD



© Maki Takagi

表紙写真：大友良英 ©Soshi Setani  
牛島安希子

今年度の3回の定期演奏会では、ヨーロッパ由来の音楽が20世紀に至って世界各地に広がってゆくにつれ、ヨーロッパの音楽が各地に影響を与えただけでなく、様々な地域の豊かな音楽から影響を受けヨーロッパの音楽自体が表現の幅を広げていき、ヨーロッパが音楽の中心というものの意識が次第に稀薄となり世界中で自由に創作されている様子を楽しみたいとおもいプログラミングした。

1回目の今日は、アメリカで生まれたジャズがもたらした音楽の跡を辿るコンサートを行いたいとおもう。

明らかにジャズの影響が顕著なものが殆どだが、牛島安希子さんにおいては恐らくこのプログラムの範疇に入れられることに居心地の悪さを感じているかも知れない。しかし初めて作品を聞いた時の第一印象はジャズやそこから派生したロックのイメージが強いものだった。その意味で我田引水よろしく、是非演奏したいがするとしたら今がチャンスとばかりに入れさせて頂いた、というのが正直なところだ。牛島さんの作品は今後様々なシチュエーションのプログラムに置いて演奏し聴いてみたいと思っている。

今回のプログラムが出来た大きな切掛けはどちらからともなく始まった大友良英さんとの対話だった。大友さんのデューク・エリントン講座のチラシを街で見かけ「大友さん、ノマドでデューク・エリントンやりませんか」と誘い掛けしたところ「やりましょう、やりましょう」となり、次にあった時にはそのアイデアは更に発展し今日の“もう一つのジャズ史”が編まれた。この原稿を書いている今、楽譜の一音も未だ目にしていないが、チケットを買って頂いた方たちと同じ気持ちで未知の音楽の誕生を楽しみにしている今日この頃だ。

佐藤紀雄

### 荒木田隆子基金

荒木田隆子さんは長年児童文学の研究や編集、出版に関わってきた方でしたが、その生涯を閉じる二年前にアンサンブル・ノマドに出会い、丁度ノマド設立20周年シリーズの頃から定期演奏会に足繁く通って下さるようになりました。荒木田さんは不幸にも2018年秋に癌で亡くられました。亡くなる10日前にもノマド定期に病院から駆け付けて下さり、示唆に富んだ感想を聞かせて下さいました。そして荒木田さんの残された遺言に「私に音楽の素晴らしさと聴く喜びを与えて下さったアンサンブル・ノマドに」と遺産の一部を贈って下さいました。いつも未知の音楽作品を楽しんでいた荒木田さんの遺志を継ぎたいと思い、基金を立ち上げ作品の委嘱に使わせて頂く事にしました。

## プログラム

### 1. I. ストラヴィンスキー：弦楽四重奏のためのコンチェルティーノ (1920)

Igor Stravinsky: Concertino for String Quartet

野口千代光・對馬佳祐 (violin) 甲斐史子 (viola) 金子鈴太郎 (cello)

休憩

### 2. M. バビット：ジャズ・アンサンブルのためのオール・セット (1957)

Milton Babbitt: All Set for jazz ensemble

江川良子 (alto saxophone) 鈴木広志 (tenor saxophone) 佐藤秀徳 (trumpet) 今込 治 (trombone)  
佐藤洋嗣 (double bass) 中川賢一 (piano) 宮本典子 (vibraphone) 芳垣安洋 (drum)  
佐藤紀雄 (conductor)

### 3. 牛島安希子：Distorted Melody -歪められた旋律 (2010)

Akiko Ushijima: Distorted Melody

菊地秀夫 (clarinet) 宮本典子 (percussion) 金子鈴太郎 (cello) 中川賢一 (piano)  
佐藤紀雄 (electric guitar) 佐藤洋嗣 (double bass)

### 4. 牛島安希子：High Time High Tide -ハイタイム・ハイトイド (2012/2021)

～改訂版初演

Akiko Ushijima: High Time High Tide

林 憲秀 (oboe) 菊地秀夫 (clarinet) 塚原里江 (bassoon) 萩原顕彰 (horn) 野口千代光 (violin)  
甲斐史子 (viola) 金子鈴太郎 (cello) 佐藤洋嗣 (double bass) 佐藤紀雄 (conductor)

### 5. 大友良英 (作曲・編曲)：ストレイト・アップ・アンド・ダウン組曲

～ありえたかもしれない (でもありそうもない) もう一つのジャズ史 (2021) -荒木田隆子基金委嘱  
～世界初演

Otomo Yoshihide(arr / comp): Straight Up And Down Suite - World Premiere  
-another jazz history that could have been (and I don't think it was) - (2021)  
including Eric Dolphy(comp) [Straight Up And Down] (1964)  
Lillian Hardin Armstrong(comp) [Struttin' With Some Barbecue] (1927)  
Duke Ellington (comp) [Black and Tan Fantasy] (1927)  
and others

木ノ脇道元 (flute) 林 憲秀 (oboe) 菊地秀夫 (clarinet) 塚原里江 (bassoon) 萩原顕彰 (horn)  
佐藤秀徳 (trumpet) 今込 治 (trombone) 鈴木広志・江川良子 (saxophone) 野口千代光・對馬佳祐 (violin)  
甲斐史子 (viola) 金子鈴太郎 (cello) 佐藤洋嗣 (double bass) 芳垣安洋 (drum) 宮本典子 (percussion)  
中川賢一 (piano) 大友良英 (guitar) 佐藤紀雄 (conductor)

## プログラムノート

### 1. I. ストラヴィンスキー：弦楽四重奏のためのコンチェルティーノ (1920)

アメリカ南部の街で生まれたジャズはあつという間にヨーロッパに飛び火し多くの作曲家を虜にし、ジャズの強い影響のもとに、しかし伝統的な節度をもって、ヨーロッパで様々な傑作を生み出したが、なかでもドビュッシー、ラヴェル、サティ、ヒンデミット、クルシェネック、クルト・ヴァイル、ミヨーなどの作品は特筆しなければならない。

「私はその本当に民衆的な側面や、その韻律構成の新鮮さや未知の切り口、黒人起源を公然と明らかにする音楽原語に魅了された(『私の人生の年代記 ストラヴィンスキー自伝』笠羽映子訳 未来社)」と強い関心を寄せたストラヴィンスキーが作曲したジャズ風の作品の最初期のもは11楽器のための『ラグタイム』だった。

『コンチェルティーノ』はフランスのフロンザレー弦楽四重奏団の依頼によって、ソナタのアレグロ楽章の一形式のように作曲された、ということだ。6分余りの小さな曲にはイタリア・バロック音楽の明るさと、ジャズの屈折するシンコペーション・リズムを更にストラヴィンスキーの意匠で大胆に味付けされたスリリングな場面転換で進められる。

佐藤 紀雄

### 2. M. バビット：ジャズ・アンサンブルのためのオール・セット (1957)

バビットは最初の大学で数学を専攻、その後作曲を学んだだけあって作曲活動初期から理論的な方法で作曲する作曲家であったため、演奏は困難をきわめ作品の真の姿が伝わらず不遇をかこつ時代が続いた。しかし優れた技術と共感をもった演奏家が出てくるにつれてその作品の価値が次第に認められる事となり、のちには多くの委嘱を受けるようになる。バビットの鋭利な頭脳から生まれた革新的な作曲語法の中にはメシアンやブルーレスに先んじていたものもあった。

ヨーロッパの作曲家たちに与えたジャズの靈感は長くは続かなかったが、その熱が冷めた頃からアメリカで本格的な影響が始まったと言える。なかでもクラシック音楽とジャズが意識的に結びついた切掛けとなったのは、1959年頃にガンサー・シュラーによって“第三の流れ”と名付けられた新潮流であった。そこで行われた双方向的な試みは豊かな実果を实らせた。本来ジャズで使われなかった楽器の参加、電子音響の積極的な援用などこの頃に始まったことはその後のジャズにも大きな影響を与えた。今度はジャズの音楽家たちがクラシック音楽に目覚めていき、ヨーロッパ音楽のなかに豊かな靈感を見始めたことに繋がる契機となったのかも知れない。

3~8人くらいの編成のジャズ・バンドをコンボ・ジャズと呼ぶが、この『ジャズ・アンサンブルのためのオール・セット』もその様なバンド編成と雰囲気想定して作曲された。楽譜は全て4拍子で書かれているが、一般的なジャズのように聞こえないのは音列理論による音体系のセットの組み合わせから出来ているためである。しかし一旦従来のジャズの先入観から離れた時、都会的でモダンな風景に圧倒されるに違いない。

『ジャズ・アンサンブルのためのオール・セット』にはガンサー・シュラーが指揮した演奏もあるくらいなので、当時バビットが“第三の流れ”に刺激を受けて書かれたと思われる。

佐藤 紀雄

### 3. 牛島安希子：Distorted Melody —歪められた旋律 (2010)

オランダのハーグ音楽院在籍中にニューヨークを拠点とするBang on a Can アンサンブルのために作曲した作品。2010年2月に作曲。オランダに渡航し、2作品目を製作するにあたり、より個人的、且つ力強い表現をしたいと考え、自分が幼少期に触れてきたジャズや民族音楽の影響を大きく打ち出した。ハーグ音楽院の作曲科はスティーブ・ライヒと同時代に生き、互いに影響を与え合った作曲家、ルイ・アンドリーセンの影響が強く、ポスト・ミニマル以降に生きる作家として何をすべきかという自問があった。まずはこの特異な編成である6つの楽器の音色が一つに混ざりあった音響を聴きたいと考え、そこからヘテロフォニックな動き、各楽器のソロイスティックな箇所を構想していった。また、旋律は電子的に操作を施したイメージで音価を決定していったが、それは、旋律を“歪める”、“捻る”という感覚であった。強拍を補填することなくかなりのスピードで各楽器の音型が同時に動いていく箇所などは、アンサンブルをする際に困難を極めると予想されたが演奏家を信じて書き進めていった。作品はオランダでの初演の後、ニューヨークでのBang on a Can Marathon concertを始め、アメリカ、マサチューセッツ美術館でのコンサートやベルギーでのアルス・ムジカ現代音楽祭などでBang on a Can アンサンブルにより演奏されたが、昨年、アンサンブル・ノマドによりオランダの世界初演から11年を経て日本での初演を迎えることができた。そして、改めて今回アンサンブル・ノマド定期演奏会で取り上げていただけることに深く、感謝しております。

牛島安希子

### 4. 牛島安希子：High Time High Tide —ハイタイム・ハイ Tide (2012/2021)

この作品もハーグ音楽院在籍中、オランダを拠点として活動している Askol|Schönberg アンサンブルのために作曲した作品である。更に今回の公演のために改訂した。ハイタイム、ハイ Tide という言葉は光る樹液のような生命に恵みをもたらすような液体が溢れ出て、飽和した状態、それに満たされた空間に身を置いているイメージから来ている。始まりのセクションは小節の終わりに向かってエネルギーを溜めて、放出、を繰り返すという周期でできている。このセクションの中心的な音組織は旋法的な語法で構成されており、緩やかに変化していくが、ヘテロフォニックな音の身振り、各パートがそれぞれポルタメント、またはグリッサンドで旋律の周辺で装飾的な動きをすることで音響全体に微細な変化を生じさせた。機能と声的な音響の在り方、推移、展開していくような時間ではなく、悠久の時間の中でただ存在しているものとしての音響、それを観察するような時間を作り出したかった。やがて飽和したエネルギーは同音連打のセクションへと移行していく。

今回作品改訂のために9年前の自分と交流することは難しくも面白い作業でした。この機会をくださった佐藤 紀雄さんに改めて感謝いたします。

牛島安希子

#### 牛島安希子 (作曲家)

作品はノヴェンバーミュージックフェスティバル (オランダ)、アルス・ムジカ音楽祭 (ベルギー)、Focus 現代音楽祭 (ニューヨーク)、マサチューセッツ現代美術館でのコンサート、ボンクリ・フェスティバル、その他、ドイツ、オーストリア、ロシア、日本国内にてBang on a Can アンサンブルなどにより演奏されている。第六回JFC作曲賞入選、Excellence Composition Competition (Expert Level) 2011、ICMC 2013、2014、MUSICA NOVA 2014、CCMC 2016 入選。愛知県立芸術大学大学院音楽研究科作曲専攻修了。ハーグ王立音楽院作曲専攻修士課程修了。現在、名古屋芸術大学非常勤講師。

## 出演者プロフィール

### Ensemble NOMAD

1997年、ギタリスト佐藤紀雄の呼びかけによって集まった、無類の個性豊かな演奏家によって結成されたアンサンブル。「NOMAD」(遊牧、漂流)の名にふさわしく、時代やジャンルを超えた幅広いレパートリーを自在に採り上げ、斬新なアイデアやテーマによるプログラムによって独自の世界を表現するアンサンブルとして内外から注目されてきた。2002年に行った定期演奏会「ケージとメシアンの間で交わす自然と宇宙に関する往復書簡」は大きな反響をよび、サントリー音楽財団「第2回佐治敬三賞」を、2015年に行った定期演奏会「再生へVol.3:祈り〜エストニアから震災復興を祈るコンサート」により「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞」を受賞した。海外からの招待も多く、2000年オランダの「ガウデアムス音楽週間」、2003年ベネズエラで行なわれた「フェスティバル・アテンポ」、2005年11月パリで行われた「フェスティバル・アテンポ」およびイギリスの「ハダースフィールド現代音楽祭」、2007年にはメキシコの「モレリア音楽祭」、また2008年10月にはソウルでの「バン・ムジーク・フェスティヴァル」などに出演。2009年秋には、中国の北京首都師範大学、北京中央音楽学院、四川音楽学院で中国人作品を中心としたプログラムの公演を行ない、好評を博した。2011年には2度目の韓国公演を開催。2013年7月にはエストニアとオランダで公演を開催。2014年にはメキシコのセルバンティーノ音楽祭に日本を代表するアンサンブルの1つとして招聘された。2015年12月に再び中国四川公演を行い、今後も中国、オランダ、スイス、フィンランド、ドイツなどでの公演を予定している。

また、近年ではアウトリーチ活動にも積極的に取り組み、保育所、病院、小学校、特別支援学校等で訪問コンサートやワークショップを行なっている。

CDは、近藤 譲「梶子」(ALCD-47)、「空の眺め」(ALCD-57)、「オリエント・オリエンテーション」(ALCD-67)、「表面・奥行き・色彩」(ALCD-93)、石田秀実「神聖な杜の湿気を運ぶもの」(ALCD-60)、池辺晋一郎「炎の資格」(CMCD-28121)、福土則夫「花降る森」(CMCD-28128)が発売されている。また、藤倉 大の「Turtle Totem」や「Diamond Dust」(共にMINABEL)にも演奏が収録されている。海外では2011年秋にエベルト・バスケスの「Bestiario (動物寓話集)」、2015年秋に「Pruebas de vida (生命の証)」がリリースされている。2014年にはオリジナル・アルバム「めぐる一Meguru」を発売。2015年夏から秋にリリースされた「現代中国の作曲家たち」シリーズは、レコード芸術誌の特選盤や朝日新聞の「for your collection」推薦盤に選ばれている。

公式ウェブサイト:[www.ensemble-nomad.com/](http://www.ensemble-nomad.com/)

### 5. 大友良英 (作曲・編曲) : ストレイト・アップ・アンド・ダウン組曲 ～ありえたかもしれない(でもありそうもない) もう一つのジャズ史 (2021)

組曲中にはエリック・ドルフィー作曲「ストレイト アップ アンド ダウン」(1964)、リル・アームストロング作「ストラッティン ウィズ サム バーベキュー」(1927)、デューク・エリントン作「ブラック アンド タン ファンタジー」(1927)他のジャズの楽曲も含まれる予定です。

今回は1920年代のデューク・エリントンや、最初期の女性ジャズ・ピアニストであったリル・アームストロングなどジャズが生まれた頃の楽曲から今日までのジャズの様々な試みを射程に入れつつ、初期のジャズがどんどん複雑化しビバップを経てモードやフリージャズにまで進化していくという従来のジャズ史的解釈ではなく、今現在の視点で見れば、ありえたかもしれない、でも実際には起こりえなかったであろうジャズの歴史を、日本の現代音楽の演奏家とともに辿ってみようような楽曲になればと思っています。

タイトルの「ストレイト・アップ・アンド・ダウン組曲」はエリック・ドルフィーが最後に作った曲「Straight Up And Down」から取っています。これほどジャズを表すのにいい言葉はなんじゃないかって勝手に思っています。

大友良英



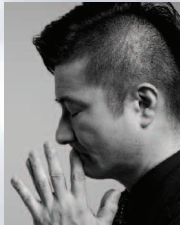
### 佐藤紀雄 Norio SATO (指揮／ギター)

1971年(現)東京国際ギターコンクール優勝。ギター奏者、指揮者として内外の現代作品の演奏、初演を手掛けている。1997年にアンサンブル・ノマドを結成し、音楽監督に就任。世界各地の主要現代音楽祭に出演。これまでに京都音楽賞、中島健蔵賞、朝日現代音楽賞を受賞。ソロ、アンサンブルのCDも多数リリースしている。現在、日本大学芸術学部、桐朋学園芸術短期大学で後進の指導にあっている。



### 甲斐史子 Fumiko KAI (ヴァイオリン)

桐朋学園音楽大学、同大学研究科修了。第3回江藤俊哉ヴァイオリン・コンクール第1位入賞。現代音楽演奏コンクール(競楽V)にて、ピアノの大須賀かおりとのデュオで第1位入賞。第12回朝日現代音楽賞、2003年度青山パロックザール賞、ドイツ・ダルムシュタットにてクライニヒシュタイナー賞を受賞。国内外の音楽祭に出演するほか、数々の初演、録音を行っている。神奈川県立弥栄高校、東京藝術大学非常勤講師。



### 木ノ脇道元 Dogen KINOWAKI (フルート)

フルートを武田又彦、金昌国、細川順三の各氏に師事。現代音楽の演奏からキャリアをスタートさせ、その意欲的な演奏活動の実績により出光音楽賞、アリオン音楽賞奨励賞を受賞。自作自演中心のフルートアンサンブル「NOZZLES」を主宰するなど、フルートの更なる可能性を模索し、「息」の沃野を切り拓く活動を展開中である。CD「blower」、「不在の花」をリリース。東京藝術大学非常勤講師。



### 佐藤洋嗣 Yoji SATO (コントラバス)

2006年東京音楽大学卒業。コントラバス奏者として、PMF(パシフィック・ミュージック・フェスティバル)2005年に参加。室内楽、オーケストラをはじめ、コンポージアムや サントリーサマーフェスティバルなど、現代音楽の演奏会にも多数出演している。また、アルゼンチン・タンゴのバンドにも出演するなど、さまざまな音楽へのアプローチを試みている。



### 菊地秀夫 Hideo KIKUCHI (クラリネット)

桐朋学園大学、同大学研究科修了。クラリネットを二宮和子氏に師事。1993年現代音楽演奏コンクール(競楽II)にて、内山厚志氏とのデュオで第2位入賞。1996年ダルムシュタット音楽祭で奨学生賞を受賞。卒業後アンサンブル・ノマドのメンバーとして活動。ライブやジャズミュージシャンたちとのコラボレーションなども行い、幅広い活動を展開している。国立音楽大学、尚美学園大学非常勤講師。



### 宮本典子 Noriko MIYAMOTO (パーカッション)

桐朋学園大学卒業。同研究科修了。1991年、東京現代音楽祭室内楽コンクール<競楽I>第3位。現在、ソロ室内楽で活動。現代音楽の数々の音楽祭への出演、録音のほか、アウトリーチ、後進の指導も積極的に行う。



### 野口千代光 Chiyoko NOGUCHI (ヴァイオリン)

東京藝術大学在学中にジュリアード音楽院へ留学。ジュリアード・コンチェルトコンペティション優勝。アーティスト・インターナショナルオーディション優勝、ヤングアーティスト・デビュー賞を受賞。カーネギー・ワイルホールにおいてニューヨークリサイタルデビュー。ジュリアード音楽院卒業後、東京藝術大学に復学し首席で卒業。在京オーケストラのゲストコンサートミストレス、アンサンブル・コルディエ(旧東京ソリステン)コンサートミストレス、紀尾井ホール室内管弦楽団、カルテット・ブラチナムのメンバー。東京藝術大学音楽学部教授、日本大学芸術学部客員教授、桐朋学園芸術短期大学講師。



### 中川賢一 Ken'ichi NAKAGAWA (ピアノ)

桐朋学園大学音楽学部でピアノと指揮を学び、卒業後、アントワープ音楽院ピアノ科首席修了。1997年ガウデアムス国際現代音楽コンクール第3位。ソロ、室内楽、指揮で活躍する他、国内外の様々な音楽祭に出演。NHK-FMなどに度々出演、新曲初演多数。ピアニスト、指揮者としても活躍。ダンスや朗読など他分野とのコラボレーションも活発他、ピアノ演奏とトークのアナリーゼは好評を博す。指揮者として、東京室内歌劇場、東京フィル、広響、仙台フィル他と共演。お茶の水女子大学、桐朋学園大学非常勤講師。

## GUESTS



©Soshi Setani

### 大友良英 OTOMO Yoshihide (作・編曲／ギター)

1959生まれ。映画やテレビの音楽を数多く作りつつ世界各地のノイズや即興の現場がホームの音楽家。美術と音楽の間のような作品から、一般参加のプロジェクトも多数。長年にわたりアジア各地の音楽によるネットワークづくりにも奔走。震災後は故郷の福島でも活動。2012年芸術選奨文部科学大臣賞芸術振興部門受賞。2013年「あまちゃん」の音楽でレコード大賞作曲賞受賞。2017年札幌国際芸術祭の芸術監督。福島市を代表する夏祭り「わらじまつり」の改革も手がける。



©Shotoku Koh

### 鈴木広志 Hiroshi SUZUKI (サクソフォーン)

東京藝術大学卒業。クラシック、ジャズ、ポップス、現代音楽の分野でボーダーレスに活躍する。狩野永徳作の国宝 上杉本洛中洛外図屏風とのコラボレーションをはじめ、活弁と生演奏による無声映画の上映や様々な企画で西へ東へ。朝ドラ「あまちゃん」大河ドラマ「いだてん」(音楽:大友良英氏)ではテーマ曲/劇中音楽を演奏。FUJI ROCK FESTIVAL(日本)、North Sea Jazz Festival(オランダ)、Montreal international Jazz festival(カナダ)、瀬戸内国際芸術祭、越後妻有大地の芸術祭など国内外のフェスティバルに参加。NHKFM「リサイタルパシオ」にソリストとして出演。



©Koji Takayanagi

### 江川良子 Ryoko EGAWA (サクソフォーン) <http://ryokoegawa.com>

東京藝術大学卒業、同大学院修了。2003年ノナカ・サクソフォーン・コンクール第2位。ソロ、室内楽やオーケストラ、吹奏楽での活動の他、『清水靖晃&サクソフォネッツ』『Saxophone Quartet athena』『大友良英スペシャルビッグバンド』等様々なアンサンブルのメンバーとして、日本国内のみならずロシア、キューバ、インドネシア、香港、中国など海外でのコンサートや音楽祭への出演、CMやサウンドトラック、CDアルバムなどのレコーディングにも多数参加。また、ピアノやハーブ、箏やアコーディオンなど様々な楽器とのデュオリサイタルを企画・プロデュースし、アレンジや委嘱作品を含めたサクソフォーンの新しいパトリオの開拓にも力を注いでいる。これまでに、サクソフォーンを彦坂眞一郎、須川展也、冨岡和男、平野公崇の各氏に、室内楽を中村均一氏に師事。洗足学園音楽大学講師。



### 林 憲秀 Norihide HAYASHI (オーボエ)

オーボエを故本間正史氏に師事。桐朋音大を経てマンハッタン音楽学校卒業。ニューヨーク州立大学パーチェース校にてオーボエをロバート・ボッティ氏に師事。同大修士課程修了時にアルビン・ブレム賞を授与され、パーチェース交響楽団のソリストとしてコンチェルトデビューを飾る。ニューヨーク・フィルハーモニック等のエキストラ奏者として活動した後、メキシコ州立交響楽団の首席オーボエ奏者に就任。帰国後の現在は、東京室内管弦楽団首席オーボエ奏者。また、アンサンブル・ノマドの他、国内の様々なオーケストラやアンサンブルへ客演し、テレビ、ラジオ、映画を含む数多くのスタジオ録音に参加している。



### 萩原顕彰 Kenshow HAGIWARA (ホルン)

北海道立旭川東高校を経て東京音楽大学に入学。第5回日本管打楽器コンクール3位入賞、第59回日本音楽コンクール入選。1991年と1992年、アスペンミュージックフェスティバルにて奨学金を得て参加。1993年と1997年にはインターナショナルホルンワークショップにおいて招待演奏を行う。現在、ソロ、室内楽、オーケストラはもとより、あらゆるジャンルのレコーディング、ミュージカル、またジャズのライブに出演するなどマルチプレーヤーとして活動中。上野学園大学非常勤講師。日本ホルン協会常任理事。ホルンを窪田各告己、安原正幸、J.チェルミナーロの各氏に、室内楽を中川良平氏に師事。



### 塚原里江 Rie TSUKAHARA (ファゴット)

東京藝術大学、同大学院修了。在学中東京藝術大学オーケストラと共演。1991年の長野アスペン音楽祭への参加を機に、アメリカコロラド州アスペン音楽祭に招待された。1998年、及び、2004年のリサイタルでは現代音楽を中心とした意欲的なプログラムが話題を呼んだ。2013年には韓国大邱国際現代音楽祭に招待され、ソロ作品を演奏、好評を博した。これまでに各地のオーケストラ、アンサンブル等と共演しつつ、様々な現代音楽の演奏会に出演している。ファゴットを岡崎耕治、中川良平、ハロルド・ゴルトツァーの各氏に師事。



©Maki Takagi

### 佐藤秀徳 Shutoku SATO (トランペット)

福島県郡山市出身。東京藝術大学卒業。ソロからオーケストラ、ミュージカル、ジャズ・ポップスのフィールドなど多方面で演奏しているフリーランスプレイヤー。シアターオーケストラキーオー(カバリエカンパニー)、横浜シンフォニエッタ、東京金管五重奏団などに所属。アンサンブルノマドレギュラークエスト。1999年〜ライブパフォーマンスグループ「チャンキルネード」(2013年活動休止)のメンバーとして海外公演や全国ツアーに参加し各方面から高い評価を得た。2013年NHK連続テレビ小説「あまちゃん」2019年大河ドラマ「いだてん」などをはじめとする劇伴音楽でも多く演奏している。大友良英スペシャルビッグバンドメンバー。2016年にはギタリスト佐藤紀雄とのデュオ「Barchetta」の活動もスタートさせ、オリジナルの世界観を作っている。



**今込 治 Osamu IMAGOME (トロンボーン)**

2004年東京藝術大学、2011年ロストック音楽演劇大学卒業。横浜シンフォニエッタ、トロンボーンカルテット・クラール、大友良英スペシャルビッグバンド、大友良英ニュー・ジャズ・クインテット、山下洋輔ビッグバンド、等メンバー。山梨トロンボーン倶楽部テクニカルアドバイザー、上野学園大学非常勤講師。



**對馬佳祐 Keisuke TSUSHIMA (ヴァイオリン)**

東京藝術大学を経てバリ国立高等音楽院ヴァイオリン科を首席で卒業。同音楽院修士課程室内楽科修了。第8回江藤俊哉ヴァイオリンコンクール第1位。2010年フランス・パッサン国際音楽コンクール第1位。2014年リヨン国際室内楽コンクール・デュオ部門にて最優秀現代曲賞受賞。2016年ルーマニア国際音楽コンクールにてグランプリ(全部門最優秀賞)受賞。玉井菜採、田中千香士、ジェラルド・プーレ、ボリス・ガルリツキーの各氏に師事。現在N響団友オーケストラコンサートマスター、ヴィルトゥス・クワルテット、東京バロックプレイヤーズメンバー。



**金子鈴太郎 Rintaro KANEKO (チェロ)**

桐朋学園ソリスト・ディプロマコースを経て、ハンガリー国立リスト音楽院に学ぶ。国内外のコンクールで優勝、入賞。2003年～2007年大阪交響楽団首席チェロ奏者、2007年～2008年大阪交響楽団特別首席チェロ奏者。現在は各オーケストラにゲスト首席として招聘されるほか、サイトウ・キネン・オーケストラ、ジャパン・ヴィルトゥオーゾ・シンフォニー・オーケストラ等で活躍中。トウキョウ・モーツァルトプレイヤーズ首席、Super Trio 3°C、長岡京室内アンサンブル、東京バロックプレイヤーズ 各メンバー。Music Dialogueアーティスト。



**芳垣安洋 Yasuhiro YOSHIGAKI (打楽器奏者／作曲家)**

関西のジャズエリアで活動を始め、'90年代より上京。「渋谷知らず」「大友良英Ground Zero」「大友良英ONJQ」「ROVO」「菊地成孔DCPRG」「Altered States」などのジャズ～アヴァン・ポップを牽引したバンドのメンバーとして活動。渋谷 毅、山下洋輔、坂田 明、板橋文夫、梅津和時、林 栄一、スガダイロー、巻上公一、ホッピー神山、一噌幸宏、鈴木大介、おおはた雄一、ハナレグミ、カルメン・マキ、おおたか静流、UA、原田郁子などのミュージシャンのコンサートやレコーディングに参加するほか、幾多のユニットを主宰。アンサンブルのワークショップ、演劇、ダンス、TVや映画の音楽制作にも携わる。欧米のジャズや現代音楽のフェスへの参加も多く、海外では即興音楽家としての評価も高い。

ライブ配信/Promusica Continuo 配信プラットフォーム/AFLS  
収録/板谷文宏(LAB0365) 写真/東 昭年 舞台/松本 努、渡辺 茜、小林賢直

**アンサンブル・ノマド  
2021 ▶ 2022**

定期演奏会#73 ～中心無き世界Vol.2～ 弦が運ぶもの  
2021年10月11日(月) 於:東京オペラシティ リサイタルホール

定期演奏会#74 ～中心無き世界Vol.3～ 人びとの聲  
2022年1月30日(日) 於:東京オペラシティ リサイタルホール

**1964 音風景**

2021年7月11日(日) 於:水戸芸術館コンサートホールATM

**ボンクリ・フェスティバル 2021**

2021年10月1日(金)・2日(土) 於:東京芸術劇場

**第3回 入野賞室内楽受賞作品コンサート**

2021年11月12日(金) 於:府中の森芸術劇場ウィーンホール



